

# 大学が取り組む現職教員研修に関する研究

## －香川大学研修講座の研修参加教員へのアンケート調査より－

香川大学教育学部附属教育実践総合センター 教師教育の在り方に関する研究プロジェクト\*  
(執筆担当者 田上 哲\*\*)

\*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

\*\*812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学大学院人間環境学研究院

### Research on Incumbent In-service Training of Teachers at University: From the Questionnaire Survey to the Training Teacher of the Kagawa University Training Course

Center for Educational Research and Teacher Development  
Research Project Team for Teacher Education  
(Contributor: TANOUE Satoru)

\* Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

\*\* Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, 6-19-1, Hakozaki, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581

**要 旨** 香川大学教育学部は、香川県教育委員会との連携の一環として、香川県教職10年経験者研修の選択研修の一部を担当することとなり、香川大学研修講座を平成17年度平成18年度に試行的に実施した。香川大学教育学部附属教育実践総合センター「教師教育の在り方に関する研究プロジェクト」において、この香川大学研修講座に関して研修参加教員に対するアンケート調査を実施した。質問した項目は、〔1〕講座の選択について、〔2〕参加した講座について、〔3〕今後の香川大学研修講座のあり方について、〔4〕現職教員研修に関する香川大学教育学部への期待)である。アンケートの結果、香川大学研修講座について、参加教員の満足度が大変高いことが明らかになった。今後は、平成19年度からの本格実施に向けて、研修講座の在り方並びに香川大学教育学部への期待に関して寄せられた意見を踏まえ、県とも協議しながら、大学だからこそ可能な、大学だからこそより有効な研修を開発していく必要がある。

**キーワード** 香川大学研修講座、教職10年経験者研修、教師教育、現職教員研修

## I. 問題の所在

### (1) 現職教員研修に取り組み始めた大学

教員養成系の大学・学部が現職教員の研修に大学・学部として組織的に取り組む状況が生まれている。

よりよい教員を養成し輩出することが、教員養成系大学・学部の大きな社会的使命である。もちろんこの使命は、これからも当該大学・学部にとって、中核的なものである。ただ、例えば、従前は大学の4年次に設定されていた、主たる教員免許状の取得にかかわる教育実習は、

多くの大学において3年次に実施されるようになってきた。このことは、教師教育の一応の完成が大学の教員養成課程の修了をもって達成するものではなくなっていることを示すものである。言い換えれば、教師教育は養成・採用・研修を通じて、恒常的に展開されていくものと考えられるようになってきたということであろう。それゆえ、教員養成系の大学・学部は、教員を輩出して責任を果たしたということではできず、養成後の教員へ適切なサポートをしていくことが求められることになる。ここに、教員養成系大学・学部が、積極的に教員研修に関わっていく必要性が生まれる。

また、国立大学が法人化され、大学に対して地域との連携や地域への貢献が強く求められるようになったことも、大きな要因である。従来から、教育委員会等が実施する教員研修に大学教員が協力する機会は多くあった。しかしそれは組織としてではなく、あくまで個人的な関係の中での協力であった。

今後、教員養成系大学・学部が組織として担うことができる適切で有効な地域連携、地域貢献の一つが地域の教員の研修への協力があることは間違いないであろう。

## (2) 教職10年経験者研修と大学

教職10年経験者研修（以下、10年研という）の実施が法制化されたのは、平成15年度である。この研修の企画立案実施は、各教育委員会が行うが、それは大変な労力とともに大きな資源を必要とするものであった。各教育委員会では、様々な工夫をしてこの実施に対応しようとしてきた。例えば、筆者に対して香川県教育委員会より平成14年度段階で、10年研への協力依頼があった。筆者は、教科指導研修（授業分析に関する研修を校外研修として当初3日間、後に半日3日間に変更）を、教育委員会担当者と共に企画立案し、平成15年度から、担当講師として実施に携わってきた。このことは、よりよい研修を実施するために、研修の資源に限りがある教育委員会が外部機関に協力を求めざるを得ない状況であったことの一つの証左として考

えることができる。

一方、平成14年5月30日に「香川大学教育学部と香川県教育委員会との連携協力に関する覚え書き」が締結され、「香川大学教育学部と香川県教育委員会との連携協議会」が発足し、その作業部会である「幹事会」が設置され、そこで連携協力の具体的な事項について検討されてきた。

本研究でとりあげる香川大学研修講座は、この連携協力の一環として、試行的に実施されたものである。香川大学教育学部はこれまでも教員免許状上申のための講習会等に協力してきたが、香川大学研修講座は教育学部が組織として、地域の教員研修に本格的に取り組む初めての機会といえる。10年研は悉皆の官制研修であり、すべての教員が一度は参加するものである。したがって、これに協力する大学・学部は、別の見方をすれば、地域の教員から大学のプレゼンスを試される事態を迎えたということである。また、大学・学部の立場から言えば、地域の教員へ情報を発信し、大学・学部への理解を広げる重要な機会を得たということではなかろうか。

香川大学教育学部は、地域の教員に対してどのような貢献を行うことができるのか。また、地域の教員に対してどのような情報を発信し理解を広げていけるであろうか。

本研究では、平成18年度香川大学研修講座に参加した教員に対するアンケート調査の結果から、大学が取り組む現職教員研修に関して、その意義や課題について考察する。

## Ⅱ. 香川大学研修講座の概要と平成18年度研修の実施状況

### (1) 香川大学研修講座の位置づけ

香川大学研修講座は、香川県教職10年経験者研修のうち、夏季休業中に実施される5日間の選択研修の中に位置づけられている。

「平成18年度教職10年経験者研修の手引（香川県教育センター）」には、選択研修に関して次のように記載されている。

選択研修は、自分自身の専門性の向上や得意分野を伸ばすこと、また不得意分野を克服するなど、個々の能力・適性等ニーズに応じて、各自で選択して行う研修である。

次の①、②の研修を5日間、夏季休業中に行う。

①香川県教育センター及び香川大学の研修講座の中から3日間選択

＊「3日間の選択のうち1つまたは2つを必ず香川大学研修講座より選択して下さい。」

＊「香川大学研修講座は、選択を希望する講座のみを記入下さい。」(1)

②課題別体験研修から1講座2日間選択

なお、平成17年度については、「希望者の多い講座は調整をしますので、～中略～香川大学研修講座は1講座選択希望者も2講座選択希望者も、それぞれ第4希望まで必ず記入してください」となっており、教育センターによって、受講調整が行われた。平成18年度の香川大学研修講座では、受講調整は行わず、研修教員は希望した講座を受講している。

香川大学研修講座の特色は、以下の4点である。

- ①大学院レベルの高い専門性をもった研修講座とする。
- ②講義ではなく、演習・実習を中心とする（受講者数の上限：10名程度）。
- ③各自の教育実践の省察や研修課題の追究を支援する。
- ④大学教員の専門性を活かし、今日の学校教育課題に即した講座を開設する。

(2) 研修講座のテーマ、担当者、日数、開催日等（後掲資料1）

平成17年度は15講座が開設され、平成18年度は5講座増え、20講座開設された。研修講座の担当教員は、平成17年度と同様に希望に基づいて選定された。また、研修講座のテーマに関しては、講座を担当する教員が各自で設定している。

研修教員の講座選択については、平成18年度

は第一希望だけを取り、受講調整をおこなわなかったため、希望者のいなかった講座が1講座あり、受講者の上限を10名程度としていたにもかかわらず、希望者10名以上の講座が3講座（10年間の教職経験を振り返ろう・19名、教師のライフステージについて考える・11名、地域史教材の開発・10名）あった。

また、新しい教育課題（国際化、情報化、福祉、学習意欲、学力低下、不登校、いじめ、特別支援教育等）に焦点を当てた研修について見てみると、平成17年度研修では、①こどもの学級生活と学級づくりの課題、②比較教育学入門－諸外国の学校組織、③障害理解教育（交流教育）の3講座がそれにあたるものであった。

それに対して、平成18年度は、下記にあげる5講座と増加している。

- ①Internetを利用した環境調和型マイクロスケール実験授業及びその教材開発
- ②DTM講座－Singer Song Writerを活用する
- ③比較教育学入門－諸外国の学校組織
- ④障害児教育とIT
- ⑤集団社会的スキル訓練の理論と実践

### Ⅲ. 研修教員へのアンケート調査の結果

香川大学研修講座に参加した研修教員を対象にアンケート調査を実施した。（アンケート票については、後掲資料2）

以下、平成18年度に実施したアンケート調査の結果について述べていく。平成17年度にも同様の調査を実施しており、顕著な違いや特徴的な部分については、平成17年度の調査結果についても言及する。

#### (1) 研修教員の概要

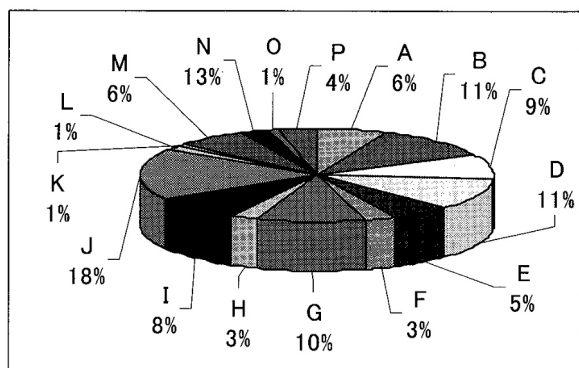
アンケートは無記名で実施し、小学校教員、中学校教員、高等学校教員、障害児諸学校教員、それぞれのべ33名、28名、46名、3名の計110名から回答を得た。（一人で2講座受講した研修教員についても、講座ごとに回答を得た。）

男性と女性の内訳は、48%と52%で、香川大学出身者は、全体の28%であった。

教職経験年数については、11年目が69%と最も多く、次いで13年目が7%、10年目、12年目、15年目が5%、14年目、16年目が4%であり、23年目が1名いた。

参加研修教員の専門教科については、次のグラフに示すような状況であった。

グラフ1 「研修教員の専門教科（研究教科）」



A:国語 B:社会・世界史・地理・歴史 C:数学・算数  
D:理科・化学・生物 E:音楽 F:美術・漆芸  
G:保健体育 H:図工 I:家庭科・生活・食物  
J:英語 K:養護 L:学校保健 M:農業 N:工業  
O:商業 P:無回答

## (2) 研修講座の選択について

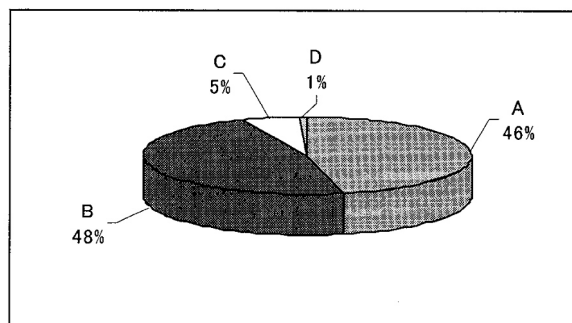
まず、研修講座の選択について、以下の7点について4検法（A：とても考慮した B：ある程度考慮した C：あまり考慮していない D：考慮していない）で回答を得た。

- ①自分の課題に即したものであるかどうか
- ②自分の専門の教科や分野（研究教科や研究分野）であるかどうか
- ③実践的な内容であるかどうか
- ④大学だからこそできる講座であるかどうか
- ⑤担当教員がだれであるか
- ⑥開催される期日
- ⑦受講にあたって必要な準備物や経費

まず、①自分の課題に即したものであるかどうかについては、グラフ2に示すように、ほとんどの参加者が自分の課題を意識して選択している。（「A：とても考慮した」46%、「B：ある程度考慮した」48%、計94%であり、平成17年度は「A：とても考慮した」55%、「B：あ

る程度考慮した」32%、計87%であった。）

グラフ2 「自分の課題に即したものかどうか」



A:とても考慮した B:ある程度考慮した

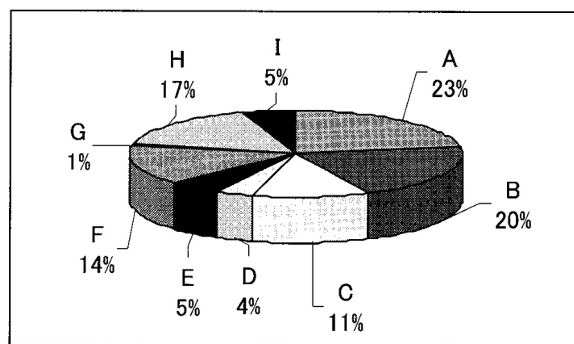
C:あまり考慮していない D:考慮していない

また、「自分の専門の教科や分野（研究教科や研究分野）であるかどうか」、「実践的な内容であるかどうか」、「開催される期日」については、「A：とても考慮した」、「B：ある程度考慮した」を合わせて、それぞれ66%、81%で、65%と高い。とくに「実践的な内容であるかどうか」については特に高いといえよう。

逆に、「大学だからこそできる講座であるかどうか」、「担当教員がだれであるか」、「受講にあたって必要な準備物や経費」は、「A：とても考慮した」、「B：ある程度考慮した」を合わせて、それぞれ39%、29%、25%と低い。

講座の選択については、さらに上記の7つの項目のうち最も大きな決め手になったことはどれかについても回答を求めた。

グラフ3 「講座選択の決め手」



A:① B:② C:③ D:④ E:⑤ F:⑥ G:⑦

H:その他 I:無回答



最も大きな決め手になったのは、①「自分の課題に即したものであるかどうか」であり、次いで②「自分の専門の教科や分野であるかどうか」、「その他」と続く。③「実践的な内容であるかどうか」は意外に少なく、⑥「開催される期日」よりも割合は低い。

「その他」としては、記述を読むと①から⑦のいずれかに分類できるものも多少見られたが、例えば、「自分の専門教科に関する講座が少なかったことと、専門教科以外で興味があったので選択した」、「自分の専門教科のものはなく、一番参加できそうかと思って選択した」など自分の専門との兼ね合いからの選択や、「ライフステージということで今後の見通しのヒントになると思ったから」、「ふりかえってというのがポイントとなった」、「教師生活の10年を区切りとしてとらえなおしてみたかったので選びました」等、受講者の多かった教職についての経験の振り返りや今後の見通しに関わるテーマが決め手となったとの回答が多かった。

### （３）参加した講座について

まず、受講した研修講座について、①開催日数、②受講生の人数、③研修の内容、④研修の方法、⑤時間配分について、適切であったどうか４検法（Ａ：大変適切である Ｂ：ある程度適切である Ｃ：あまり適切でない Ｄ：適切でない）で回答を求めた。

その上で参加した講座に関する総合的な満足度の回答を求めた。

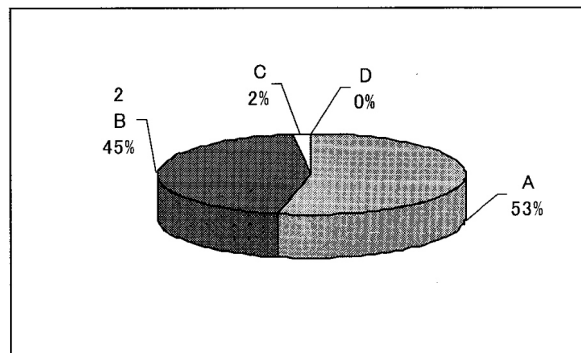
#### １）研修講座の適切性について、

「研修の内容」について、「Ａ：大変適切である Ｂ：ある程度適切である」を合わせると98%となり、ほとんどの受講者が適切であったと考えている。また、「研修の方法」についても「研修の内容」よりは低いものの、「Ａ：大変適切である Ｂ：ある程度適切である」を合わせると95%であり適切性の認識は大変高いものであった。

「研修の内容」「研修の方法」については、平成17年度の調査においても、「Ａ：大変適切で

ある」と「Ｂ：ある程度適切である」を合わせるとそれぞれ、98%、97%と同じように非常に高かった。

グラフ４「研修の内容の適切性」



A: 大変適切である B: ある程度適切である

C: あまり適切でない D: 適切でない

それに対して、「開催日数」、「受講生の人数」、「時間配分」については、「Ａ：大変適切である」、「Ｂ：ある程度適切である」を合わせると、それぞれ92%、88%、89%と適切性の認識はかなり高いものの、１割程度の受講生が不適切であったと認識している。また、「受講生の人数」に関しては、受講者数調整を行った平成17年度の調査では、「Ａ：大変適切である」51%、「Ｂ：ある程度適切である」42%、計95%であり、平成18年度の「Ａ：大変適切である」48%、「Ｂ：ある程度適切である」40%、計88%よりも若干高かった。

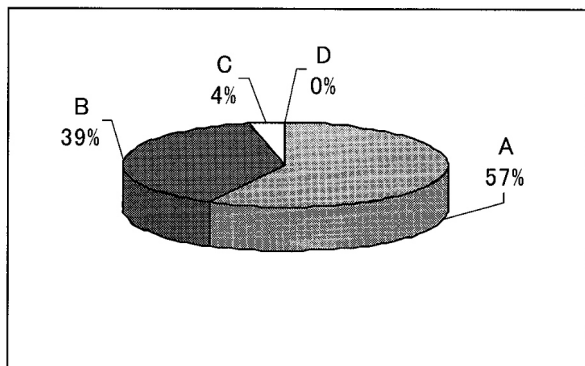
#### ２）参加した講座の総合的な満足度

参加した研修講座の総合的な満足度（Ａ：大変満足である Ｂ：ある程度満足である Ｃ：あまり満足でない Ｄ：満足でない）はどうでしたかという問に対しては、「Ａ：大変満足である」だけで57%（平成17年度は62%）、「Ｂ：ある程度満足である」まで合わせると96%（平成17年度は97%）と非常に高い。

それに対して、「Ｃ：あまり満足でない」は4%（平成17年度は3%）、「Ｄ：満足でない」は0%（平成17年度も0%）であり、大変低くなっている。

「A：大変適切である」を選んだ理由として、「講義形式ではなく、より実践的な経験が出来たからです。皆で作り上げる喜びを実感できました。中学校ではあまり味わえないことなので、この夏の記憶に残ると思います」、「大学の先生と話し合いながら授業を作り上げていく事ができ、たいへん勉強になった。実際に授業をすることができたのもよかった」、「みんなで協働し、たいへん実践的な研修が行えたから」等の意見が見られた。

グラフ5 「講座に関する総合的な満足度」



A: 大変満足である B: ある程度満足である  
C: あまり満足でない D: 満足でない

それに対して、「C：あまり満足でない」を選んだ理由としては、「自分たちの教職経験を発表しただけで、討論する、考えを深めるという段階までに至らなかった（受講者サイドの問題だと思います）」、「他の教員の体験や話を聞いたのはよかったけれど、講師の先生の熱意ややる気を感じられなかったのが残念である」、「受講者が残念ながら1人しかいないので、他の実践が全く聞けない。紹介された事例が小学校のもので即中学校では使えない」、「先生の話はおもしろかったが、もう少しいろいろな事例をとりあげて話をして欲しかった」ということであつた。

#### (4) これからの香川大学研修講座のあり方について

アンケートの最後に、①今後香川大学研修講座でとりあげたらよいと思われる研修テーマや

内容、②香川大学研修講座をよりよいものにしていくための改善点や課題、③10年経験者研修に限定せず、現職教員研修全般について、今後香川大学教育学部が担う役割や香川大学教育学部に期待したいことについて、自由記述で回答を得た。

#### 1) 今後香川大学研修講座でとりあげたらよいと思われる研修テーマや内容

##### ①大学ならではの研修

「大学ならではの専門的内容が用意されており、今後もこのような方向でよいと思う」等、大学の専門性に期待する回答があつた。

平成17年度の調査の回答にも、「大学ならではの研修をして頂きたい」、「大学ならではの専門的な内容」、「大学の施設設備だからこそできる（後略）」等の意見があつた。

##### ②今日的な教育課題に対応した研修

「(ADHD, LD, 自閉症) など発達障害について」、「特別教育支援について」、「いじめ」、「教育相談。保護者への対応」、「小学校英語」等の今日的な教育課題に対応した内容・テーマを期待する意見があつた。今日的な教育課題に対応した研修を要望する意見は、平成17年度調査でも多く寄せられた。

##### ③現場で役に立つ実践的な内容テーマの研修

「専門的なことで、実践ですぐ生かせるようなもの。(学級経営など)」、「教科に関する講座を増やして欲しい(理論ではなく実践できる活動例の紹介、提示)」、「即、実践。お土産として持って帰れるもの」、「現場で役立つもの」等、実践的で現場ですぐに役に立つ内容テーマを求める意見も多かった。平成17年度調査の回答でも同じように「授業実践にすぐ生かせるような内容のもの」「現場ですぐに役立てられる具体的実践」、「具体的な教授法、トラブルへの対応の仕方」等の意見があつた。

##### ③現場の教育実践を見直す研修や視野を広げる研修

平成18年度調査では明確な意見は見られなかったが、平成17年度調査では、「異校種や教科外の人と演習をしたい（学生の意見も聞きたい）（今後の現場で誤った固定観念が身に付いていたら、それに気づき軌道修正したいから）」、「現場ではどうしても実践重視になるので（中略）現場を見直すという講座はいいと思います」等、少数ながら現場の教育実践を見直す研修や視野を広げる研修を期待する意見があった。

#### ④高等学校教員に対応した研修

平成17年度の調査ではあまりなかったが、平成18年度の調査では、「工学部や農学部で行っているような実験や実習もあればと思います」、「工学部や農学部の研修も取り入れてもらいたい」、「小・中 中心の学部ですので望むのは間違いかもしれませんが、教科（高校）も種類があったらなーと思います」、「高校の授業に導入できそうな最先端の実験」等、高等学校教員に対応した研修を求める意見も多く見られた。

#### 2) 香川大学研修講座をよりよいものにしていくための改善点や課題

今後の研修講座を考える上で、重要な手がかりになるものであり、以下にすべての意見をあげる。

- ・せっかく大学で研修するなら、もう少し、日数にゆとりをもって研修したい。
- ・大学の先生の専門性を生かして全国や世界の動きを知ることができる内容があるとよい。
- ・駐車場はどこがもっとも近い、とか教えてほしい。
- ・受講者のレディネスを考慮した内容にする必要があると思います。特に基礎知識の有無は理解の大きな差になります。
- ・専門家としてのアドバイスやご指導はとてもありがたくうれしく思います。ただ、専門的すぎて現役の学生等には分かって大学卒業後10年もするとむずかしく感じる部分もありました。

りました。

・テーマや内容が同じであれば、昨年度の受講者の感想等を載せてもらえると選択の一材料 になるので入れてもらいたい。

・受講者人数は定員内でおさえてほしい（今回の講座はよかったです）

・受講人数が少ないように思えたので、もっと参加するように宣伝すると思う。

・10経の研修日程がつまっているし仕方ないと思うが、8/30、31は学校が始まっていたり、翌日から始業なのでもう少し早い方がいい。

・研修内容をできるだけ具体的に書いて頂きたい。（前年までの内容、公評等）

・8/31の講座は日程上あまりありがたくありません。もう少し早い日程がよい。

・それぞれの講座を一日ではなく、複数日開催し研修を積むと、より実践的な力が備わるのではないかな？

・時期の検討（夏休みに集中しすぎている）

・講座の中でお互いに意見を言い合う時間があってもよいかも。

・日数をもう少し取ったほうがよいものもあると思います。

・教職を目指す学生と意見交換する。かつて、自分が目指していた教員として、もう一度、自分を見つめ直す機会になると思う。

・大学の研究レベルを伝えるのか（高校の実態を無視して）、高校の実態をきちんと理解して学校のことを深めるのか、どちらかがやや中途半端。

・ビデオ視聴などによるケース会をとおしての意見交換。

・実践活動を含む体験型の研修を増やして欲しい。

・学校現場で生かせるテクニックを教えてもらいたい。極端に言えば、理論などの講話は香大に来なくてもその先生の本を読めばある程度分かるし、教員は実践力があってこそ教員と言える。

・大学生（教師を目指している人）と教員の

#### ディスカッション

- ・ どうせやるのであれば実のあるものに！！
- ・ 研修講座の案内を分かりやすいものに…
- ・ 少人数でやると知りたいこともよく分かるのでよいと思う。
- ・ もっと開講講座をふやしてもらいたい。
- ・ 学校現場ですぐに使える内容を増やしていただけるとよくなると思う。
- ・ 今回が初めてだったので特に気付かなかった。
- ・ 大学と現場の教員がもっと自由にざっくばらんに交流できるようになれば、もっとよい講座ができるようになると思う。
- ・ 中・高側は現状を大学側に伝えることができ、大学側からは専門的な内容も含めながら中・高でいかせられるような内容であると大変ありがたいと思います。
- ・ 研修講座の内容が分かりにくく選択するときに困った。
- ・ 教諭にしか受講できない内容ではなく、養護教諭にも参考になる研修講座が増えるといいと思います。
- ・ もう少し日程を早めに設定していただきたいです。
- ・ 講座が多いのもっとしぼった方がよい。講座を選択するときに事前に内容（準備物や経費も含めて）を知らせてほしい。
- ・ 日程が重ならないようにある程度日をずらしてほしい。2日といわず、もう少したくさん受講できるといい。
- ・ ひとつのテーマについて連続して研修する3日連続とか。
- ・ 今日のような実際に授業することはたいへん勉強になる。現場ですることはよかったと思う。
- ・ 日程等の調整
- ・ 開催時期や内容、回数など
- ・ さらに、学校現場と連携して、現場と研究機関が連絡を取り合って実践的な内容を望む。
- ・ 日程を1週間早めてはどうか。

- ・ 他の講座は受けていないので分からないが実践したものや実習などを中心にあればいいと思います。
- ・ 人数調整と講座の精選（希望の少ない講座はふるいにかけるべき）
- ・ 通年実施してほしい。
- ・ 現職で大学を利用できれば
- ・ 研修方法の工夫
- ・ 大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・ 日程を1週間早めてはどうか。8月の初旬にして頂くとより参加しやすい。
- ・ 半日の研修も多く入れてほしい。
- ・ 現代の現場に生きる内容のものをテーマにしてほしい（具体的には？ですが）駐車場の不便さもきびしいです
- ・ 今年度のままでいいと思います
- ・ 特に高校の教員は教科の専門性が問われると思うので、その勉強になるような講座を開いてほしい
- ・ 内容と事前にもう少しくわしく知りたい
- ・ 小・中と合同である場合、テーマによっては共通点が少ない場合もあるので、注意しないといけないと思いました
- ・ 実践的な内容の講座が増えればよいと思う

平成17年度調査の回答もほぼ同じような内容であったが、平成18年度の回答には明確に見られなかった意見として、「10経だけでなく希望者を受け入れる研修講座にしてほしい」、「このような機会を10年経験者研修だけでなく、別の人にも機会を与えてはどうか」等の意見もあった。

3) 10年経験者研修に限定せず、現職教員研修全般について、今後香川大学教育学部が担う役割や香川大学教育学部に期待したいこと

#### ①現場に即した内容・テーマ

今後香川大学研修講座でとりあげたらよいと思われる研修テーマや内容で前述したものと同様に、「実際の現場の実態に即した考えや

実践等の指導をこれからもしてほしい」、「実際の現場に結びつくような研修」、「現場とつながった研修の内容（実践にすぐ生かせるもの）を期待しています」等の意見も多く見られた。同様の意見は平成17年度調査でも多くあげられていた。

## ②現場との交流

「学校現場との交流がもっとはかれたり、生徒が困ったときにアドバイスを気軽にもらえるようなシステムができるとよいと思う」、「専門的な研修はやはり大学の先生が一番よく知っていると思う。その知識や技術を現場に生かすことが教員の役目である。大学の先生も現場にもっと足を運んでももらえれば相互理解が深まると思う」、「附属中以外とも、もう少し交流があってもいいと思う」、「公立校の現場と直接関わる機会が増えるといいなと思いました」、「現場での現職教育の講師として専門的な立場からの意見を頂きたい。可能な教授と内容の公開」等、大学に現場との交流を求める声も多く見られた。

## ③教員養成への要望

平成17年度調査ではほとんど見られなかった意見であるが、平成18年度調査では、「教育実習生のマナーや勤務態度が年々悪くなっている。大学でモラルやマナーを教えるべきことではないが、現場としてはとても気になる。本当に教員になりたいのであれば、採用試験までもっともっと現場のことを知るべき」、「生徒指導ができる人材を育ててほしい（学力だけでなく）」、「年々学力はあっても人との関わりがうまくできない若い方々が増えています。大学はしつけの場ではないのですが、学生達の社会生活面にも留意してほしいです」等、大学の教員養成に対する要望が散見された。

## ④その他（平成17年度調査の回答から）

その他平成18年度調査の回答には見られなかった意見として下記のようなものがあった。

・高校の教員は教育学部出身者が少なめなので

教授法についての授業も受けてみたいと思う。

・免許等、単位に影響する内容の講座が多くあると嬉しいです。

・現職教員が長期休業中に大学院修了のため単位が得られるとうれしいです。

・香川大学卒業生でないので敷居が高い。

・現場では実践的なものがほとんどなので理論的な部分を学びたい。

・普段の現職教育では、経験に基づく手法や考えや実践が中心となるので理論的、潜在的なものを短時間で分かるように現場におろし、指摘してくださるとうれしいです。

## IV. まとめと今後の課題

香川大学研修講座について、参加教員の満足度が高いことが明らかになった。この点は試行的な取り組みとしては大変評価できることである。

研修教員へのアンケート調査結果を踏まえて、本格実施に向けて、さらによりよい研修講座をどのように考えていくかが課題である。

まず、研修のシステム・形態の改善の問題がある。例えば、研修講座の日程、実施時期について、大学側の日程と研修教員側の日程のすりあわせをどのように行うか。また、研修講座の選択や受講者調整をどうするか。この点については、とくに、選択に際しての講座の内容等について事前にもう少し詳しく知りたいという要望もあり、講座の情報の周知をどの程度どう行うかということを検討する必要がある。また、香川大学研修講座を10年研の研修講座としてだけでなく、10年研の対象教員以外にも研修の場として開くことができるのかということも検討していく必要があろう。

次に、最も中核的な検討課題として、研修のテーマ・内容の問題がある。これは講座担当者の決定の方法等にもかかわる問題である。

今後研修で取り上げてほしい内容・テーマについて、「実践的なもの」「すぐに役立つもの」という要望が多くあげられた。こういった要望に大学が、十分に応えることができるである

うか。応える方向で取り組むことがよいのか。「実践的なもの」「すぐに役立つもの」については大学でなくても、あるいは大学でないほうが適切な研修が可能ではないか。

この点に関わって、平成18年度は、新たに設定された教職の振り返りやライフステージの講座に多くの希望者があったように、むしろ受講者の真のニーズは隠れていることも大いにありうるのではなからうか。大学側としては、受講者の真のニーズを掘り起こすようなテーマ、研修を行う必要がある。

また、研修の方法に関しては、学校種を越えた交流が必要だという声がある一方、高等学校教員に絞った研修がほしいという声もある。前者については、さらに、現職教員だけでなく、大学院生や大学生との交流を望む声もある。こういった交流は、大学だからこそ可能な研修の方法として考えられる。一方後者については、専門的な内容を専門的に研修したいとニーズがあるということであり、これもまた、一般の官制研修よりも大学が担うにふさわしい研修のあり方だと考えることができる。

このような検討も含めて、大学だからこそ可能な、取り組むべき研修はどのような研修であるかを追究する必要がある。

最後に、大学が現職教員の研修に取り組むということはいかなる意義をもつか、改めて考えてみる。

問題設定で述べたように、ある意味では、取り組まざるを得なかった状況が生まれたということは事実である。しかし、この機会を大学側はむしろチャンスととらえ、それが孕む可能性を検討していくことが必要であらう。

まず、大学にとっては、学外に目を開いて、学校現場や現場教員を具体的に理解できる機会を得ることができる。これまで、大学は、どちらかという学内に閉じこもり、学外の現実からは離れたところで、研究教育を行ってきた。そういった旧来の体制を変革していく一つのきっかけとなるのではなからうか。

また、それは同時に、現場に対して情報を発信し現場から大学を理解してもらう機会でもあ

る。大学が現場への理解が足りなかったように、現場側も大学への理解が乏しかった。例えば、現場は大学にすぐに役立つ実践的なものを求めがちであるが、端的に言って大学にはそれに答えられるような資源を十分に蓄積していない。

大学と現場の相互理解を阻害してきたものは、ディスコミュニケーションの問題であったと考えられる。

大学が教員研修に取り組む、とりわけ香川大学研修講座のように、大学教員が一方的に講義するのではなく、小人数でゼミ形式、演習形式の研修に取り組むということは、大学教員と学校現場教員がものごとに協同して取り組むということである。アンケートには厳しい意見も出されたが、それは、そのような取り組みを行ったからこそその意見であり、抽象的印象的なものではなくより具体的で実質的な意見になっている。だからこそ、大学と現場の相互交流の必要性にふれた意見も見られたのではなからうか。

香川大学教育学部への期待として平成17年度調査にあげられた「普段の現職教育では、経験に基づく手法や考えや実践が中心となるので理論的、潜在的なものを短時間で分かるように現場におろし、指摘してくださるとうれしいです」という意見は、今後の研修のあり方だけでなく、これからの大学ならびに大学教員のあり方を考える上で重要な手がかりになるのではないか。このような意見にこたえていくには、大学と大学教員は、自分の専門の研究を深めるとともに、現場、現場教員、現場の実践についてより深く理解していく必要がある。

今後は、平成19年度からの本格実施に向けて、研修講座の在り方並びに香川大学教育学部への期待に関して寄せられた意見を踏まえ、県とも協議しながら、大学だからこそ可能な、大学だからこそより有効な研修を開発していくことが必要である。

#### 参考文献

- ・田上哲、大学における現職教員研修システムの開発に関する基礎的考察2－教師の研修観と職能成

長のタイプの問題－，香川大学教育実践研究第12号，2006

- ・平成16～17年度科学研究費補助金基盤研究（C）（研究代表者：田上哲 研究課題番号 16530516）研究成果報告書「大学における現職教員研修システムの開発研究」，2006
- ・田上哲，大学が取り組む現職教員研修の条件・課題に関する考察，教科教育学研究第23集，日本教育大学協会第二常置委員会編，2005
- ・香川大学教育学部附属教育実践総合センター・指導力の向上を図る教員養成・研修に関する研究プロジェクト（執筆担当：田上哲）「教員研修への大学のかかわりと教育実践総合センターの役割と課題」，香川大学教育実践総合研究第11号，2005
- ・東京学芸大学大学教員養成カリキュラム開発センター平成15年度「重点研究費」報告書（研究代表者：池田延行），「現職教員研修に関する教員養成系大学の役割に関する研究－特に，10年経験者研修をめぐって」，2004

研究プロジェクトメンバー及び研究協力者（所属はいずれも当時のものである）

平成17年度

プロジェクトメンバー

- 田上 哲（附属教育実践総合センター・助教授）
- 佐藤明宏（国語教育・教授）
- 野崎武司（保健体育・助教授）
- 米村耕平（保健体育・助教授）
- 大西孝司（学校教育・助教授）
- 金崎知子（附属坂出小学校・教諭）
- 松浦正裕（附属坂出小学校・教諭）
- 田崎伸一郎（附属高松小学校・教諭）
- 廣瀬貴志（附属高松小学校・教諭）
- 多田 守（附属養護学校・教諭）
- 今井孝治（附属養護学校・教諭）

研究協力者

- 赤熊俊二（香川県教育センター研究員・附属教育実践総合センター客員研究員）
- 岡本泰範（香川県教育センター研究員・附属教育実践総合センター客員研究員）
- 桑嶋梨奈（附属教育実践総合センター・教務職員）

平成18年度

プロジェクトメンバー

- 田上 哲（附属教育実践総合センター・助教授）
- 佐藤明宏（国語教育・教授）
- 岡田知也（音楽教育・教授）
- 野崎武司（保健体育・助教授）
- 米村耕平（保健体育・助教授）
- 金崎知子（附属坂出小学校・教諭）
- 北村篤子（附属坂出小学校・教諭）
- 藤田泰宏（附属高松小学校・教諭）
- 高橋正人（附属高松小学校・教諭）
- 猪熊優子（附属養護学校・教諭）
- 黒川明子（附属養護学校・教諭）
- 近藤邦子（附属養護学校・教諭）

研究協力者

- 小出芳朗（香川県教育センター研究員・附属教育実践総合センター客員研究員）
- 高橋健二（香川県教育センター研究員・附属教育実践総合センター客員研究員）
- 桑嶋梨奈（附属教育実践総合センター・教務職員）



資料 1 : 平成 18 年度香川大学研修講座内容概要

講座 番号	研修講座のテーマ	対象	日数	期 日	担当教員 (専門)
1	国語科授業づくり演習	小	1 日	8 月 25 日 (金)	佐藤 明宏 (国語教育)
	国語科授業づくりの方法について解説する。その後、全員で教材研究・指導案づくり・教具作りに取り組み、同日午後、附属高松小学校の児童をお借りして飛び入り 1 時間の授業を行う。そこで各自、自分が受け持ちのクラスでやってみたい教材を一つ準備してきてほしい。なお、テキストとして佐藤明宏『自己表現を目指す国語学力の向上策』(明治図書) 2004 年、2000 円を使用するので、事前に購入のうえ持参されたい。				
2	地域観察から地域調査へ	小中 高障	1 日	8 月 31 日 (木)	新見 治 (社会科教育)
	身近な地域の学習を指導する社会科・地理担当教員にとって、自らの地域調査スキルを向上させることは重要である。この講座では、午前中は教室で地域観察・地域調査の方法に理解を深め、午後は実際にフィールドに出かけ地域観察を行い、これを地域調査に展開させる方法を討議したい。参考書として、竹内ほか『身近な地域を調べる』古今書院、2800 円を紹介するので、是非ご活用いただきたい。				
3	地域史教材の開発	小中 高障	1 日	8 月 28 日 (月)	田中 健二 (社会科教育)
	身近な地域の歴史を調べ、教材化する手法について学ぶ。素材としては、高松城下町を用いる。まず江戸時代の絵図などを用いての演習を通じて基礎的な知識を身につけ、ついで香川県立歴史博物館の常設展示を見学することで見識を深め、最後に旧高松城下町地域の巡検を行って地域を見る目を養う。自転車が必要とするので、受講者は高松市のレンタサイクルなどで参加されたい。				
4	小学校算数科：教材と授業の研究	小	1 日	8 月 25 日 (金)	長谷川 順一 (数学教育)
	算数の授業を実施する(実施した)際、教材の扱いに関して困ったところ、授業で問題と思われたことなど、3～4 の事例を取り上げ、検討する。そのため、本講座への参加者は、前もって事例のレポートを提出すること。提出方法などの詳細については、後日連絡する。				
5	実数論 (※受講者は最大 6 人です。)	中高 障	1 日	8 月 28 日 (月)	岡 晋平 (数学教育)
	中高の数学の教育現場で、「実数とは何か？」ということに言及することはまれであろう。しかし教師がその答えを用意しておくことは必要だと思う。この講座では、われわれが実数直線に対してもつ素朴な直感が、その論理的体系とどのように関係しているかを解説・議論し、実数に対する理解をより深めることを目指したい。				
6	数学的考え方とは	中高 障	1 日	8 月 25 日 (金)	安西 一夫 (数学教育)
	新学習指導要領の数学科の目標には、「数学的活動を通して創造性の基礎を培う」という文言が加えられた。問題解決過程の内的な活動における数学的な考え方について考察を加えるとともに、数学的な考え方について議論し理解を深めることを目指したい。				
7	簡単な実験を通して大気の科学を学ぶ	小中	1 日	8 月 29 日 (火)	森 征洋 (理科教育)
	気象は身近な自然現象であるが、その仕組みを理解するためには物理学的な見方が必要である。この講座では簡単な実験を通して、大気圧・温度・雲・風など大気科学の基本概念を学ぶ。用いる実験教材は日常生活で用いられるものや、理科実験室にあるものがほとんどである。				
8	環境調和型マイクロスケール実験授業	中高	1 日	8 月 30 日 (水)	高木 由美子 (理科教育)
	高等学校や大学の教養実験で実施されている無機定性分析実験や酸化還元滴定実験等を環境に配慮し、現状の 100 分の 1 以下のスケールで行う方法について学ぶ。コロラド州立大学のトンプソン教授との共同研究である。				
9	最近の天文教育の話題	中高	1 日	8 月 28 日 (月)	松村 雅文 (理科教育)
	理科のなかでも、天文領域は昔から難しいものとされています。この講座では、(1)「天文は難しい」理由をまとめ、(2)最近の天文教育の工夫を紹介し、(3)実際に実習を行ってみます。				
10	DTM講座 —Singer Song Writer を活用する	小中 高障	1 日	8 月 30 日 (水)	岡田 知也 (音楽教育)
	コンピュータを利用して音楽と触れ合います。楽器を演奏できる方、できない方、楽譜を読める方、読めない方、それぞれに音楽と触れ合う切り口が見えてくるかもしれません。まずはアレンジソフトを使ってカラオケづくりから始めましょう。				

11	美術表現：鑑賞授業のつくり方	小中 高障	1 日	8 月 28 日（月）	安東 恭一郎 （美術教育）
	子ども（幼児期～青年期）の美術表現の発達とその支援の関連性を基にして、授業を進めます。また、子どもの表現発達の視点から鑑賞授業の取組について考えます。当日は、皆さんが指導している子どもの表現物を持参して下さい。				
12	からだと心を探る	小中	1 日	8 月 30 日（水）	山神 真一 （保健体育教育）
	身体感覚を静的・動的姿勢、反射・反応動作など様々な角度から捉え直すとともに、心との関連性を踏まえて、体験実習を通して追求していく。そして、体力面を心とからだの両面から分析し、健康関連としての体力像を明らかにしていく。				
13	生活経営総論 ー生活変容の実態から	中高 障	1 日	8 月 25 日（金）	時岡 晴美 （家庭教育）
	現代社会においては、自己責任が問われる場面が増大している。本講座では、現代の学問領域にあまりこだわることなく、生活を総合的・構造的にとらえながら、生活変容の実態を具体的に提示し、生活者個人が主体的な生活を営むために何が重要かを考察していく。				
14	総合的学習をどう創るか	小	1 日	8 月 31 日（木）	松本 康 （社会科教育）
	総合的学習における子どものとらえ方、育て方を考えます。受講者が実践の中で直面している課題と、過去の総合的学習のすぐれた実践例とを突き合わせながら、実践へのヒントを得ることをねらいます。				
15	教師のライフステージについて考える	小中 高障	1 日	8 月 31 日（木）	櫻井 佳樹 （学校教育）
	教職 10 年目の教師とは、いったいどのような存在なのでしょう。教職 10 年という時間の経過を振り返り、自らが置かれているいま現在を考えることを通して（参加者の活発な意見交換を基に）、明日の教師像を模索します。				
16	10 年間の教職経験を振り返ろう	小中 高障	1 日	8 月 29 日（火）	毛利 猛 （学校教育）
	教育学という学問は、私たち自身の教育経験の反省に根ざした学問である。この講座では、10 年間の教育経験について、とくに子どもとの関わりに焦点を当てながら振り返ってみたい。テキストとして、毛利猛『臨床教育学への視座』ナカニシヤ出版、2200 円を使用する。事前に購入し、第 6、7 章を読んだうえ参加されたい。				
17	比較教育学入門 ー諸外国の学校組織	小中 高障	1 日	8 月 31 日（木）	柳澤 良明 （学校教育）
	諸外国（主にドイツ）の学校組織と日本の学校組織を比較することを通して、日本の学校組織をとらえ直すとともに、日本の教育課題に対する認識を深め、各人の教育実践のビジョンを形成することを目的とする。なお、可能なかぎり、出席者の提出する学校組織上の課題に即して進行する予定である。				
18	こどもをとらえるあなた独自の見方を探る	小中	1 日	8 月 30 日（水）	有馬 道久 （学校教育）
	教師には、気に入る子と気になる子、ウマが合う子と合わない子ができがちです。教師ごとに子どもをとらえる観点・偏りを心理テストで明らかにし、子どもとのよりよい関係をつくるための方法をともに考えます。本講座参加者には、事前にクラスに関する質問票に回答してもらいます。その詳細は後日連絡します。				
19	障害児教育と IT	小中 高障	1 日	8 月 29 日（火）	坂井 聡 （障害児教育）
	コミュニケーションエイドやパソコン、携帯電話などが障害のある子どもたちの生活を変える可能性がある。いくつかの事例を紹介しながら、今後障害児教育にどのように IT を取り入れていけばいいのかについて考えたい。				
20	集団社会的スキル訓練の理論と実践	小中 高障	1 日	8 月 29 日（火）	宮前 義和 （臨床心理）
	近年、学級単位、学年単位あるいは学校単位で行われている集団社会的スキル訓練（社会的スキル（対人関係能力）を育成する具体的方法）の理論的背景及び実践について、演習・討論を交えながら研修を進めます。				

## 資料2:香川大学研修講座アンケート票

香川大学研修講座（教職10年経験者研修・選択研修）についてのアンケート

香川大学教育学部附属教育実践総合センター  
教師教育に関する研究プロジェクト

本アンケートは、昨（平成17）年度より試行的に実施している香川大学研修講座に参加された研修教員の方に実施しているものです。今年度の研修の選択や実施状況、また問題点や課題を明らかにして、来年度以降の取り組みに生かすと共に、大学が取り組む教員研修のあり方についての検討のための基礎的な資料を得ることを目的にしております。

なお、回答結果につきましては、統計的に処理し、個人を特定する形での取り扱いはいりません。お考えの通りご回答いただくようよろしくお願いいたします。

〔0〕ご自身のことについて、項目を掲げてあるものについては番号選択し、項目を掲げていないものについては記入してください。

1. 性別 ①男性 ②女性
2. 置籍校種 ①小 ②中 ③高 ④障
3. 出身大学等 ①香川大学 ②その他
4. 教職経験年数 [ ] 年 月
5. 専門教科（研究教科） [ ]
6. 参加した研修講座のテーマ [ ]

問	番号
1	
2	
3	

〔1〕講座の選択について

（1）香川大学研修講座の受講講座を選択する際、以下の点はどの程度考慮しましたか。

①.とても考慮した ②.ある程度考慮した ③.あまり考慮していない ④.考慮していないの4段階で当てはまる番号を記入してください。

- ①自分の課題に即したものであるかどうか
- ②自分の専門の教科や分野（研究教科や研究分野）であるかどうか
- ③実践的な内容であるかどうか
- ④大学だからこそできる講座であるかどうか
- ⑤担当教員がだれであるか
- ⑥開催される期日
- ⑦受講にあたって必要な準備物や経費

項目	番号
①	
②	
③	
④	
⑤	
⑥	
⑦	

（2）講座選択の際、最も大きな決め手になったことはどのようなことですか。上記の項目に該当するものがあればその番号を、該当するものがなければ、どのようなことかお書きください。

〔2〕参加した講座について

（1）参加した講座について、下記の項目はどの程度適切だと思いましたか。

①.大変適切である ②.ある程度適切である ③.あまり適切でない ④.適切でないの4段階で当てはまる番号を記入してください。

- ①開催日数
- ②受講生の人数
- ③研修の内容
- ④研修の方法
- ⑤時間配分

項目	番号
①	
②	
③	
④	
⑤	

（2）参加した講座に関する総合的な満足度はどうでしたか。（①.大変満足である ②.ある程度満足である ③.あまり満足でない ④.満足でない）の4段階で当てはまる番号を記入し、その理由をお書きください。

番号	理由

〔3〕これからの香川大学研修講座のあり方について

（1）今後香川大学研修講座でとりあげたらよいと思われる研修テーマや内容をあげてください。

（2）香川大学研修講座をよりよいものにしていくための改善点や課題について、自由にご意見をお書き下さい。

〔4〕10年経験者研修に限定せず、現職教員研修全般について、今後、香川大学教育学部が担う役割や香川大学教育学部に期待したいことについて、自由にご意見をお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。